

第 2 回

栃木県立夜間中学設置準備等に係る意見交換会 議事録

開催日時：令和 6（2024）年 7 月 22 日（月）午後 3 時から午後 4 時 30 分

開催場所：県庁舎本館 6 階 大会議室 I

栃木県教育委員会事務局義務教育課

第2回栃木県立夜間中学設置準備等に係る意見交換会 議事録

1 開催日時 令和6（2024）年7月22日（月） 午後3時から午後4時30分

2 開催場所 県庁舎本館6階 大会議室1

3 出席構成員（敬省略）

佐々木 和也、野原 恵美子、結城 美鶴、小川 美穂、鈴木 佳之、日向野 晃、
福田 治久、瓦井 千尋 以上8名（全10名中）

4 議事内容

(I) 「多様な学び」のニーズ調査結果について

| | |
|------|---|
| 事務局 | （資料1を用いて、「多様な学び」のニーズ調査結果について説明を行う。） |
| 座長 | 事務局からの説明に対して、質問等を受け付ける。 |
| 福田委員 | 資料2ページ「回答者属性」について、日本人の年齢層や性別を伺いたい。 |
| 事務局 | 日本人の詳細な属性については、現在集計を行っているところである。この場では回答できないことを御理解いただきたい。 |
| 小川委員 | 回答者の年齢と居住地について、結果をどのように捉えているか伺いたい。回答結果は40代が一番多く、10代は16%だった。このアンケートは、どのような取り方をした結果なのか。また、栃木市が多かった理由をどのように捉えているか、という2点に関して考えを伺いたい。 |
| 事務局 | <p>1点目の年齢については、調査対象者を「学齢を過ぎた方」として調査を行った。各市町の公共施設や学びを求める方が多く集まるような機関に依頼をし、周知を行った。回答結果については、年齢による違いは多少あるが、かなり満遍なく、いろいろな世代の方から御回答いただき、意見を集めることができたと思えている。</p> <p>2点目の居住地で栃木市の方が一番多かったという分析については、調査実施にあたり関係施設を訪問したり、小山市や宇都宮市の自主夜間中学関係者の方を通じて調査を広げていただいたりしたことにより、対象者に本調査が伝わりやすくなったことが、このような結果になったのではないかと考えている。</p> |
| 瓦井委員 | 夜間中学の（他県の）運営から、60代や70代からの回答が多いという予測をもっていたが、今回の結果は、40代、それから20代から10代の方が多い。今回、60代70代の方に、果たしてこのニーズ調査が行き渡ったのかどうか。その辺りの手応えを伺いたい。 |
| 事務局 | 高齢者への周知については、県内に3か所あるシルバー大学校に依頼したり、高齢者が集まる県庁でのイベントでアンケート用紙を配布し回答いただいたりした。全ての方に届けられたかという課題はあるが、ある程度のサンプルは集められた。 |
| 瓦井委員 | 年代を問わず、夜間中学を本当に必要とされている方々に、このような調査が |

| | |
|-----|---|
| | 行き渡ることが一番望ましい。ニーズのある人が当事者意識をもてるようなアンケートの取り方や周知の方法を、今後検討いただけるとありがたい。 |
| 座長 | <p>今回は、限られた期間でより多くの方にアンケートを取るという方針で進められたと承知している。引き続き、このような調査が必要になる場合があるので、意見を参考に実施方法については検討いただきたい。</p> <p>今回、幅広い年齢層からアンケートが取れているので、例えば、30代から40代までの年代層と高齢者のように少し群分けをして、それぞれの年代でニーズの違いはあるのかなどを分析されていれば紹介いただきたい。</p> |
| 事務局 | まだ詳しい集計はできていないが、年代別の分析は重要なことだと思うので、今後の分析に生かしたいと思う。 |
| 座長 | 県立夜間中学ができてから審議する内容になるが、外国籍の方、高齢の方、若年層の方が混合するクラスになることが十分予測される。アンケート結果は、年代別のニーズの違いなど、少し踏み込んだ議論をするために有効なデータとなるので、事務局への要望として伝える。 |

(2) 栃木県立夜間中学設置基本計画（案）について

| | |
|------|---|
| 事務局 | (資料2を用いて、栃木県立夜間中学設置基本計画（案）について説明を行う。) |
| 座長 | 基本計画案については、第1回意見交換会で構成員から出た意見も反映されている。基本計画案の、特に「3 県立夜間中学設置の基本的な考え方」に対して、質問等を受け付けたい。 |
| 小川委員 | <p>学校規模については、1学年1学級で、1学級の生徒数は35人以内とあるが、1学年2学級にする、外国人学級を作る、少人数制にするということは可能か伺いたい。</p> <p>県立特別支援学校は、少人数学級で、スキルのある先生が進学から就労まで切れ目ない支援をされている。それが県立夜間中学でもできたらよい。(コースを)選択できるとか、少人数で学べるということが可能であれば検討いただきたい。</p> <p>私は、不登校の子どもを支援している。学校のサポートが受けられない子どもは、家庭にとどまってしまうことが多い。中学校までは、学校の先生とつながっているが、卒業すると誰ともつながらずに社会と関わるきっかけも全くないという子どもが、実はたくさんいる。そのような子どもがアクセスできるとか、通わないけれど何かサポートを受けられたり交流をもつ機会があったりすることが叶えられたらよい。入学以外のサポートも検討いただきたい。</p> |
| 座長 | 1学級35人という基本的な考え方に対して、コース設定や少人数クラスの編制をどうするか、可能な範囲で伺いたい。 |
| 課長 | 実際の1学級は35人学級だが、それぞれの学習状況等をきちんと把握した上で、それぞれの生徒に合ったコース別授業等も当然考えている。35人をただ2つに分けるのではなく、それぞれの生徒に応じたコース別学習等ができるように、今後カリキュラムを検討していく予定である。 |
| 座長 | カリキュラムについては、こちらの意見交換会以外でも検討されると思うの |

| | |
|------|---|
| 座長 | <p>で、我々としては、大きなグランドデザインを描き、(カリキュラムについては) そちらにお任せしたい。</p> <p>前回会議で修業年限について、様々な立場からの意見を踏まえ、(基本計画案では) 上限を設けない形で対応していただいている。原則３年だが、個別最適な学びを本人が教員と判断し、延長することも可能となっている。</p> |
| 野原委員 | <p>対象生徒について、外国人の場合、親の仕事の都合や様々な境遇で子どもが入国をするというケースがある。その一つに、母国の中学校を卒業して日本に来るというケースがある。母国で中学校を卒業し、日本の高校に進学したいという場合に、義務教育を修了していない者、十分な学びができずに中学校を卒業した者、この二つに含まれない場合がある。基本計画案には、この最後に「等」があるので、等のところで外国人への対応について柔軟に判断いただきたい。</p> |
| 課長 | <p>対象生徒についてもある程度柔軟に対応し、入学を希望する場合には、本人と面談をしながら、中学２年生や３年生からの入学にも十分対応していきたい。</p> |
| 座長 | <p>(年度途中の入学について) 海外の学校では、１０月から新学期が始まるというところが圧倒的に多く、日本のように４月から始まるというところは少ない。その辺りを柔軟に対応していくということである。その他に意見はあるか。</p> |
| 福田委員 | <p>同様に対象生徒について伺う。ニーズ調査結果や自主夜間中学の状況から、外国人のニーズが非常に多いということがわかる。先進校では、９割近くが外国人生徒であるという学校が多いという話も伺っている。別途日本人枠を設けるというようなことは考えているか。</p> |
| 課長 | <p>夜間中学は、法律上の一条校であり、入学を希望する方に関しては、国籍を問わず入学を可能としている。ただし、入学前には個人面談等を重ね、(対象者が) 夜間中学が適しているのか、又は、例えば日本語教室に通いながら夜間中学へ入学の方がよいのか、例えば自主夜間中学と連携するのがよいのか、いろいろな場面で面談等を行い、入学を決めていく。夜間中学に入学したい人には入学していただくという形としたいので、あえて日本人、外国人の枠を設けずにいきたいと考えている。</p> |
| 鈴木委員 | <p>県立中学校というからには、基本計画案の「基本的な考え方」が大原則となる。設置理念の冒頭に、「誰でも、いつからでも最適な学び直し」ということがうたわれているので、柔軟性や個に応じた対応についても十分考えていただけるのだと思う。柔軟な対応等については、今後十分協議して進めていきたいと考えているので、基本的な考え方については、(今回示されたものに) 賛成する。</p> |
| 結城委員 | <p>(基本計画案の入学要件は、隣接県住居者の受入れや年度途中の入学等、) 前回の意見が十分盛り込まれた内容になっていると思う。</p> <p>私たちは、前回の会議を受けて話し合っているので、「原則県内居住」や「原則４月入学」という意味が、「これは原則であり、幅があるということだ」と理解できる。ただ、この文書だけで入学要件を見たときに、原則４月だから、原則県内だから、と(入学に対する) 気持ちが進まないということが起こる可能性があるのではないか。今後(入学者を) 募集していく際には、ただし書きの部分を詳し</p> |

| | |
|-------|---|
| | く説明することが必要であるとする。 |
| 座長 | 説明会等では、当事者向け説明資料が別途用意されると思うので、解釈に幅が出る部分においては、不安にさせないような説明を事務局にお願いしたい。 |
| 結城委員 | あと1点、入学対象者を「学齢経過者」に限った理由について伺う。 |
| 課長 | 現在、各市町には教育支援センター、各学校には校内教育支援センター等が設置されているので、学齢期の児童生徒には、そのようなところを活用いただき、県立夜間中学では、学齢期を超えた方を対象にした。 |
| 座長 | 様々な子どもたちを発達段階に応じてサポートしていく機能が市町村にあるので、そちらとの役割分担で、学齢経過者という形でグランドデザインに取り入れたということだろう。 |
| 日向野委員 | 学悠館高校の生徒も非常に多様化している。言葉で多様化と言うのは簡単だが、非常に混沌としているというのが率直なところである。県立夜間中学では、個別に多様な生徒に対応するということが、実際の入学者のイメージや、卒業段階の目標など、何か目指す姿があるかどうか伺いたい。 |
| 課長 | 高校進学に向けた学びを必要としている方も多いと思うので、学悠館高校をはじめ、県立学校等への進学又は就職できるようにするための学力を付ける等を考えている。就職又は進学という部分では、生徒たちが力を伸ばすこと、それぞれがもっている夢を叶えられるような、社会的自立に向けた教育課程を組み合わせながら、卒業まで支援していければと考える。 |
| 座長 | 一つずつ上の段階への進学を目指すこと。中学校までの学力を備えて社会で活躍できるようになること。自分自身の生活を豊かにし、生涯を通して学習すること。その三つが大きな学びのニーズ、目標であると思う。 学悠館高校では、様々なニーズの実現を目指されているので、その実践を（県立夜間中学の）カリキュラム編成等の参考にすることができるのではないか。そのような観点から本日の協議では意見交換を行いたい。 |
| 福田委員 | 確認だが、学齢経過者というのは、15歳以上ということでしょうか。 |
| 座長 | よい。中学校を卒業した方が対象である。 |

(3) その他

| | |
|------|--|
| 座長 | 令和8年度に開校する県立夜間中学をよりよいものにするために、また、持続可能な夜間中学にしていくために、各委員の専門的な立場や経験等からの意見を伺いたい。県立夜間中学だけでは、なかなか多様なニーズに応えていくのは難しいので、関係機関とどのように連携していくことができるか、機能強化していくための手立て等について、意見交換をしていただきたい。 |
| 野原委員 | 今回のアンケート結果から、外国人の学習ニーズが多いという状況がわかった。現在、外国人の多様な学習ニーズの受け皿として2か所の自主夜間中学があり、また、生活に必要な日本語を身に付ける場として多くの地域に日本語教室がある。それらの機関で学習している外国人の中に高校進学を目指している方がいる場合には、県立夜間中学を紹介するなど、学習者のニーズに合った最適な学び |

| | |
|------|--|
| | <p>の場を提供できるよう、関係機関が様々な形で連携していくことが重要だと考えている。そのような連携体制があるとよい。</p> |
| 小川委員 | <p>私は、不登校の子どもに関わっている。そこからの連携先を提示できたらと思う。</p> <p>まず、不登校の子どもが低年齢化していると思っている。私が支援する子どもの中には、小学校1、2年生から学校に行っていない子どもや十分な学びを受けていない子どももいる。以前は、九九や計算はできるという子どもが高学年や中学生になって不登校になることが多かったが、今は九九を習う前から学校へ行けない子どももいる。学びは本当に大切であり、大人になって自立して生きていくための力を付けさせたいと考える。生活を豊かにするための知識や技能というのはもちろんだが、その前に、中学校までの学力や一人で生きていける力を身に付けさせたい。そのため、多様な学びを可能とできるよう、1学級の中には、九九から学び直す必要がある子どももいるということを想定してカリキュラムを作してほしい。それは、県立夜間中学だけではできないので、フリースクールや市町の教育支援センターのような今ある機関が必ずつながり、中学3年生の学齢を過ぎたあとは、県立夜間中学で学び直しができるようになるとよい。フリースクール、親の会、市町の教育支援センター、各学校の先生、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどと連携していけるとよい。</p> |
| 座長 | <p>不登校の低年齢化は、大変大きな社会課題である。そのようなことから考えると、夜間中学だが、小学校段階の学びの保障も必要である。また現在、不登校児童生徒を支えているフリースクールや様々な機関と連携することも必要である。連携するためには、恐らくコーディネートする人材が夜間中学側にも民間側にも必要になってくるだろう。そのようなシステムづくりが肝になるのではないかな。</p> |
| 結城委員 | <p>私たちの自主夜間中学では、主に高齢者の方の学び、外国籍の方の日本語、そして不登校を経験した20代、30代、40代の方の学びといった多様なニーズにどのように対応していくか、日々模索状態である。特に、不登校だった方が自立するための学びは大変難しい。就職したが、基礎的な学びを得ていないことが障害となり、仕事が続けられない方がいる。(柔軟な)教育課程の編成は、とても難しいことだと感じている。</p> <p>令和8年の開校に向け、この1年間で教育課程を編成するということは、とても難しく、タイト(なスケジュール)だと思う。開校までの間、自主夜間中学の生徒の学ぶ様子を見学に来ることで、よりよい教育課程の編成につながるのではないかな。外側から見て作るものと、実際に必要な方との体験で作るものでは違うと思うので、そのような連携も検討していただきたい。</p> |
| 座長 | <p>小山と宇都宮にある民間の夜間中学には、学び直しを求める不登校を経験した方、高齢者の方、そして外国人の方というように様々なタイプの方が通っている。もちろん、民間の夜間中学においても手探りのところはたくさんあると思うが、そのような取組を先行事例とすることができないのではないかな。様々なノウハウ、ニーズを把握されているので、教育課程を編成する段階からしっかりと連携をして、よりよい教育課程の編成につなげていただきたい。また、教育課程を編</p> |

| | |
|-------|--|
| | <p>成する際は、リジッド（厳格な）なものではなく、大きく作っておいて生徒の様子に合わせて柔軟に変更できるようなものが必要になってくるのではないかな。</p> |
| 鈴木委員 | <p>高野課長からも「本県に合った、よりよい夜間中学に」という話があった。では、本県らしさとは何か。それは、これから色付けをするわけだが、それはこの議論の先にあると思う。今後、「本県の夜間中学はこうだ」というものをしっかりと形にしていただければと思う。</p> <p>令和元年度と令和6年度のニーズ調査結果から、この5年間で回答者の属性に変化が見られる。令和元年度の回答者は、ほとんどが日本の方だが、今回は外国の方が多かった。回答者の掘り起こしができた背景には、自主夜間中学の活動が影響していると考えられる。県南、宇都宮の回答者が多いということが、それを証明しているのではないかな。</p> <p>前回の議論では、（自主夜間と県立夜間の）住み分けをどうするかという話があったが、住み分けではなく共に歩いていくことや、ノウハウを共有した上で行政の強みを出していくということが、本県の色を加えるということだと思う。これから更に、幅広く意見をいただき、そのニーズをしっかりと捉え、本県の形を作っていけるとよい。今、各学校には様々な専門家が配置され、「チーム学校」として教育活動を行っている。夜間中学においても、そのような体制づくりを着実に進めていけるとよい。</p> |
| 座長 | <p>民間と行政の住み分けではなく、協働していく。共に歩いていく。本来、教育というものは、行政だけで行うとか、学校だけで行うものではなく、親や地域住民も含めた全ての人が関わっていくものである。夜間中学をよりよいものにしていくために、共に歩むという体制をグランドデザインにも最初から描き、教育課程の編成に進んでいくことが大切である。</p> |
| 結城委員 | <p>栃木県ならではの夜間中学というところで、フレックス制を取り入れている県立高校に夜間中学を設置するということは、メリットであると考ええる。例えば、夜間中学の生徒が、学悠館高校の授業を聴講のような形で学ぶという可能性はあるかな。</p> |
| 課長 | <p>それに関しては、今後研究が必要のため、現段階では何とも言えないところである。学悠館高校との調整もあるので、研究を進めるということで御意見を預からせていただきたい。</p> |
| 日向野委員 | <p>（学悠館高校は）栃木市の一番よい場所にある。今回、夜間中学ができることは、本校にとっても幅広い年齢層の方と学べるとてもよい学びの機会になると捉えている。夜間中学の生徒や地域の高齢者の方との交流の機会ができ、それは生徒だけでなく我々教職員のためにもなる。今後、その辺りを教育委員会と検討しながら、より効果的な学びを具体化していくことになる。現時点では、細かい部分については未定である。</p> |
| 座長 | <p>夜間中学の日課などについては、今後検討していく内容である。</p> |
| 福田委員 | <p>不登校生徒の進学先の選択肢の一つとして、保護者としても考えているところである。不登校生徒の人数は、毎年増えており、昨年度、宇都宮市の不登校中学</p> |

| | |
|------|---|
| | <p>生は、1,000 人を超える状況である。これは、大規模校の総生徒数よりも多い。子どもたちを救う一つとしての夜間中学を考えていけるとよい。</p> <p>この夜間中学においても1人1台端末は配られると思うが、高齢者においては、ICTの利用がつまずきになることもあるので、その活用について考える必要がある。また、宇都宮市は、「U@りんくす（ゆーあっとりんくす）」という「バーチャル空間に登校する」システムがある。夜間中学でバーチャル空間への登校というのは違うと思っているが、いろいろなICT技術が教育現場でも取り入れられているので、全く活用しないということではできないだろう。ICTの活用についても検討していただきたい。</p> |
| 座長 | <p>生徒層に幅がある学校なので、ICTの効果的な活用なども考慮した上で、適切なシステムをどのように作っていくかということが必要ではないか。</p> |
| 瓦井委員 | <p>「柔軟性」、「連携」、「相互補完」の三つの切り口から、栃木県が誇る夜間中学を構築していけばよいのではないだろうか。</p> <p>柔軟性について、例えば、生徒一人一人のニーズに合う教育課程を編成するためにも、入学した生徒に対して定期的にニーズ調査を実施し、生徒がどのようなことを望んでおり、それを具現化するためにはどのような教育課程の編成が必要かなどを常に検討し、柔軟に変えていくということが必要だと考えられる。</p> <p>連携について、例えば、地域連携の一つとして栃木市に今年4月にオープンした「県立みかも自然の家」を校外学習等の学校行事で活用するのはどうか。特に、不登校の子どもが苦手とする集団での活動や、人との交流を克服できるような行事を地域の社会施設等で実施できるとよい。みかも自然の家の他にも、ラムサール条約で登録されている渡良瀬遊水地では、自然観察で生き物などに触れることができる。小山市、結城市では、結城紬で伝統文化に触れることができる。そのような自然や文化に触れてみることは、将来の職業意識をもつことにつながる。人との交流については、例えば、夏休みに学悠館高校の先生に専門的な授業を開講していただき、そこへ夜間中学の生徒が参加できるようにし、高校との接点を設けることで「将来、自分も学悠館高校に入ってみよう」というような、進学への意識高揚につながる。それは、切れ目のない支援体制にもつながるだろう。令和10年度には、栃木市にある県立栃木農業や商業などが、共創型の学校として、総合的な学校に生まれ変わる予定である。そのような高校とも交流し、例えば、農業系であれば、農産物を育ててみる。商業系であれば、実際に作ったものを売る活動を高校生と一緒にやってみる。そのような活動を教育課程の中に取り入れ、職業意識を醸成させていくことも大切である。さらに、そのPRは、全国まんが甲子園でよい成績を収めている栃木女子高校美術部の皆さんにお願いするというような連携も構築できるとよい。</p> <p>現実的に大変なのは、「相互補完」であると考え。1学年1学級、35人の中には、日本語ができない方、不登校であった方、特別な支援が必要な方など、様々な方がいると思われる。学級としては35人だが、実際に学習するときには、それぞれの特性に応じた学びの場所を設けていくことが必要である。県立夜間中学1校だけで全てを賄うことはできない。どうしても、先進事例をもつ小山市や</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>宇都宮市の自主夜間中学や様々な機関と連携を図り、お互いの強みを生かし合うという相互補完が必要となる。例えば、外国語に特化した学習をする場合には、自主夜間中学で学ぶ。反対に、自主夜間に通う方で高校などへの進学を目指して学習をしていくという方には、県立夜間中学を紹介する。県立夜間中学は公立の学校であるため、どうしても各教科、特別活動、総合的な学習の時間、学級活動といったカリキュラムを一通り実施しなければならない。そのため、英語だけに特化して学習したい方がいても、それだけを叶えさせることは難しい。そのような場合には、自主夜間中学の先生とタイアップしながら、お互いの強みのところで補完し合う。県立の夜間中学で果たせないことは、逆に自主夜間中学のノウハウを生かしていく。或いは、地元の大学の外国語が堪能な先生から御指導いただく。或いは、特別支援学校と常に定期的な交流の機会を設けて、特別支援が必要な生徒に対しては、専門家の目で温かく見守っていただく。そのような意味での相互連携、相互補完が大切であると考える。これらの視点を踏まえ、設置準備を進めていただきたい。</p> |
| 座長 | <p>柔軟性、連携性、相互補完性というキーワードでまとめていただいた。</p> <p>県立の夜間中学には、一般の中学校の機能を持ち、一般の中学校が果たす役割を保証するという大前提がある。しかし、そもそも（夜間中学は）一般の中学校に比べて多様なニーズに対応している特色がある。多様な学びのニーズの全てを県立夜間中学だけで賄うことは不可能である。今、様々なところで強みを出し合い、限られた資源で最大限の教育効果を上げていこうという取組が行われている。この県立夜間中学においても、そのような観点をグランドデザインに取り入れ、実際の教育課程の編成をスタートしていけるとよい。</p> |
| 座長 | <p>本日の意見は、どれも栃木県に設置する夜間中学に重要なものであった。今後行われるパブリック・コメントも含め、第3回意見交換会に向けた検討を事務局にはお願いしたい。この意見交換会は、スタート地点であり、ここでエネルギーをかけて大きなグランドデザインを作り上げていく。今後も事務局と連携をし、このグランドデザインをしっかりとしたものにして、本県の夜間中学がよりよいものになるように英知を絞っていくことが必要である。</p> <p>既に夜間中学を設置している自治体には、上手くいっていない事例もある。そのような事例も検証し、本県の夜間中学設置に生かすことも可能である。これから設置する夜間中学が、とにかく持続可能であること。そして、夜間中学を必要とする生徒たちが真ん中にあること。これを忘れずに、この先もエネルギーを注いでいきたい。</p> <p>この意見交換会は、第3回で終わりになるが、各構成員においては、それぞれの立場から今後も積極的に夜間中学に関わっていただきたい。そして、夜間中学がよりよいものになることを祈願し、座長からのお願いも含めて、挨拶とさせていただきます。</p> |